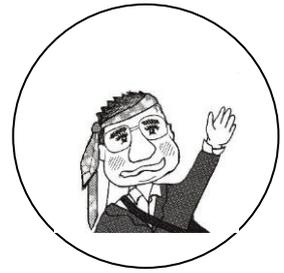


# 大魔王のお笑い神話



謎の超笑力をもつ大魔王が、あなたに贈る不思議なムダ話

発行：トラベル・ミトラ・ジャパン

ぼん子画

(530-0041) 大阪市北区天神橋 1-18-25 第3 マツイ・ビル 201 TEL : 06-6354-3011

お笑いエッセイのメール発信をご希望の方は、ご連絡下さい。(E-mail : daimao@travelmitra.jp)

## 「道を歩く人がやってきた」⑦

わが輩はふらふら健康状態である。5月28日インド・オディシャ州・デーの大イベント(京都)でひどく疲れていた。6月4日に、ミトラ城の肉丸君がインドから帰国してきた。かなりハードであったらしく、機内で風邪をひいたようである。その肉丸君の風邪を、お土産代わりに頂戴した。市販薬で快方にむかったが、16~18日の国際ヨガ DAY 伊勢の激務で、再び咳き込み状態になった。どうやら風邪をこじらせてしまったようである。

6月号で書いた日本人僧の講演会が、24日京都の大学であるというので、少々無理をして出かけて行った。コロナ災禍で帰国できなかったが、四年ぶりのお目見えである。330人収容の講堂は満席状態であった。会場を見回すと、山田さんの姿をみつけた。

5月に山田さんから「先日テレビで、インド仏教の第一人者になられた僧侶の番組を見て、興味を持ちました」とメールを頂いた。それで講演会の案内を送った次第である。同時に6月号も添付しておいた。声をかけると少し驚いたようであった。

「大魔王は批判的なので来ないと思っていました」

と山田さん。

「批判的だから、体調が優れなくても来たのですよ」

と返答した。

しかし全面的に人間否定しているわけではない。少なくとも右手拳を突き上げるシュプレヒコールに同調したくないのである。

四十四年間に一度も帰国することなく、インドに滞在したことは驚異的である。これは称賛に値する。だいたい十年間インドに居続けると、ネジが一本狂うものである、とするのがわが輩の狭い見解である。ところが、日本に一時帰国すると、精神のバランスが成り立つ。なぜ僧は一時帰国しなかったのであろうか。

さて、講演内容だが、日本人僧は右手拳を突き上げて檄を飛ばすだけで、相変わらず内容はなかった。わが輩が秘かに注視していたのは、日本人僧ではなくサポーターたる諸研究者の動向であった。諸先生がどのような話のときに顔の表情を緩めるか、渋い顔をするのか等を観察していた。ときに媚びるような顔を見た、ようにも思えた。

全般的な印象だが、(失礼ながら) 学者先生を子ども扱いしているようにみえた。つまり件の僧は、理論(思想)よりも実践行動が上位にあると理解しているので、理論などクダラ

ナイと思っているのである。この場合の理論とは、仏教の思想のことである。

講演での面白いエピソードを紹介しておこう。

某研究者が件の僧の「夢告」について語った。夢に菩薩が現れて「南天鉄塔（ナーグプル）に行け！」と命じたという話である。

そのとき、僧から「夢じゃない！」と、一喝が入った。夢ではなく現実に菩薩が目の前に現れた、と言いたいのである。

慌てた研究者は「夢と言っていません。『夢告』と言ったのです」と言い訳した。

「夢」と「夢告」とどう違うのか、頭の悪いわが輩には、とんと理解できなかった。気骨のある研究者だと聞いていたが、残念なやり取りであった。

研究者たちが、僧の膨大な手紙類から〈思想なるもの〉を抽出しようとする作業が始まったそうだが、これでは甚だ不安にならざるを得ない。

ところで、読者諸氏よ。近ごろ夢をみますか。

わが輩は午前2時ころに、ろくでもない夢をみる。どのような夢であったか殆ど記憶にない。心臓の血管が収縮するためか、尿意のためか、身体の異変を感じて目が覚める。十分に熟睡していないため、起き上がってトイレに行くのが苦痛である。

朝方に夢をみることがある。この時間帯の夢にはリアリティらしきものがある。夢は自由で創造的である。しかし、五感で経験したこと以外のことを夢観することはできない。たとえば、見たこともない宇宙人を夢観することはできない。見たこともない色を、夢で観ることはできない。夢は経験の奇妙な「組み合わせ」である。

インドでは、夢はカルマ（行為）ではない、とされている。カルマは原因と結果で成り立つ。たとえば、夢で殺人を犯しても処罰されない。つまり結果がないのである。そもそも殺人（原因）そのものが虚構なのである。

しかし、虚構としての「夢」は、覚醒時の「カルマ（行為）の反映」であることは間違いない。だから、夢の「心理学」が成り立つといえる。

夢というと、明恵（1173-1232）のことを思い出す。インドに渡航しようとして渡れなかった鎌倉時代の僧である。自分の夢を記録にとどめたことでも知られている。われわれ凡人にとって、夢はただの夢にすぎないが、宗教者にとっては深い意味をもつことがある。この深い意味において、件の僧は「夢ではない！」と一喝したのである。

ひょっとしたら、五感で経験したことがない神秘体験があるかもしれないが、大抵は経験した事の範囲内にある。件の僧の菩薩も経験範囲内のことである。その裏話は別の機会に述べるとしよう。

明恵は夢を分析し自己観察したが、件の僧は菩薩を「夢」から実物の如き「幻視」に変容させ、自己ではなく外界（社会）に拡張してしまった。すべては現象で実体なきものとする龍樹菩薩の空の哲理は、どこかに消えてしまったのである。

この辺りで「虚像の道」をやめて、次号では「道のない人」の話をしよう。この社会は幻、幻影、現象にすぎない。それに関わってはならないという道である。